

授業アンケートの自由記述に基づく改善は 臨床推論学習に効果があるのか ——精神障害領域作業療法における授業を対象として——

吉村 友希^{*,**}, 戸田 真志^{**}, 久保田 真一郎^{**}, 鈴木 克明^{***}

Are Improvements Based on Free Responses to Class Surveys Effective for Clinical Reasoning Learning?

—A Study of a Course That Includes Clinical Reasoning in Occupational Therapy in the Area
of Psychiatric Disorders—

Yuki YOSHIMURA^{*,**}, Masashi TODA^{**}, Shin-Ichiro KUBOTA^{**}, Katsuaki SUZUKI^{***}

1. はじめに

文部科学省は、大学に対して、授業の内容および方法の改善を図るための組織的な研修や研究の実施に努めるよう規定している⁽¹⁾。そのため、多くの大学で、授業改善の基礎資料を収集する目的で、学生に対してアンケート（以下、授業アンケート）を実施している。それは、医療専門職教育においても同様であり、実際に、リハビリテーション専門職学生が受講する科目においてリッカート尺度の授業アンケートに基づいた授業改善事例⁽²⁾が見られる。

その一方で、学生にとってわかりやすい授業へと改善するために、学生がどこでつまづいているのか学生本人に聞くことの重要性が指摘されており⁽³⁾、つまづき箇所を聞く方法として、自由記述形式のアンケート（以下、自由記述アンケート）が挙げられている。この自由記述を有効に活用するために、授業アンケートの自由記述の分析を行った先行研究⁽⁴⁾も見られる。このことから、医療専門職教育においても学生に対して授業に関する自由記述を収集、分析し、それに基づき授業を改善することは、学生にとってよりわかりや

すい授業を設計するために有益であると推測される。

このような先行研究は見られるものの、先行研究では、以下の3点の課題がある。1点目は、医療専門職教育の授業アンケートに基づいた改善事例は、リッカート尺度の分析に基づいて改善を行っており自由記述は用いていないことである。2点目は、授業アンケートの自由記述の分析を行った先行研究では、分析に基づき改善箇所の提案を行っているものの、改善策を試行しておらず、その改善が有益かどうかの検証はなされていないことである。3点目は、医療専門職教育の授業アンケートに基づいた改善事例では、改善の効果検証に授業アンケートを用いており、学習目標に対する効果については検討がなされていないことである。

そこで、本研究では、学生にとってわかりやすく、教員にとって教えるにいとされる臨床推論⁽⁵⁾の内容を含む授業において、学生から得られた自由記述をもとに改善を行い、その効果を検証することを目的とする。その際、効果検証には、学習目標に沿った課題評価を用いる。改善に自由記述を用いることで、リッカート尺度では得られない学生のつまづき箇所に即した改善策の考案が可能となり、効率的な授業改善が可

* 熊本保健科学大学保健科学部（Faculty of Health Science, Kumamoto Health Science University）

** 熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻（Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University）

*** 武蔵野大学学習開発センター（Center for the Development of Enhanced Learning, Musashino University）

受付日：2024年8月13日；再受付日：2024年11月18日；採録日：2024年12月20日